

# 秘められた言の葉

澁加 江

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『旅の演者はかく語りき』のボツ詰めです。

本編をすつきりさせるためにお蔵入りにして居たものですが、勿体ない精神が出てきたので。

それぞれに時間軸がバラバラです。

目次

墳墓の役者はかく語りき	1
失われた光・前	10
失われた光・後	21

## 墳墓の役者はかく語りき

すっかり馴染んでしまった豪華な椅子に深く腰掛けた髑髏の主。名君と最近噂される魔導国国王、アインズ・ウール・ゴウン。

そんな彼は今、守護者統括であるアルベドと共に執務にあたっていた。

(ふむ。この川の水を引き大きな農地を作れば一気に農地が増えて食糧の蓄えが増えるな。国庫が潤い、ゆくゆくはナザリツクの強化が更に進みそうだ。よし)

書類にアルベドの話を聞きながら一通り目を通すと、アインズは手元にある凝った意匠の判子で書類に一押しする。

その紙を可決済みの書類が入れられた箱の中に放り込み、新しいものに目を通す。

守護者を筆頭とした僕たちや各地の領主から寄せられる意見書に目を通し、判子を押すだけの簡単な作業である。しかし簡単に単純な、いつそ眠気すら感じるだろうこの時間はアインズの安らぐ時間の一つである。

(こうしていると仕事してると気分になるんだよなあ。……仕事がある事がこんなありがたい事なんてさ)

アンデットになり睡眠を必要としなくなって以来、時間というものが余って仕方がなかった。

この世界に来た直後の、5、6年は中々に忙しかったのを覚えていいる。異世界に飛ばされた事で情報収集に躍起になり、ギルド拠点維持とまさかのNPC達が冗談で言った「世界征服」を実現するために建国。予想していなかった事態の連続は睡眠などが不要になって活動時間が格段に増えたアインズをもってしてもてこ舞いな忙しさだった。しかしそれが10年、20年、半世紀も経つと成り行きで治める事になった国も安定してきた。すると優秀なナザリツクのしもべ達は自分達だけで十分であると溢れる忠誠心で働き、結果、アインズに回ってくる仕事もかなりの部分が減り、時間を持て余すようになってきたのだ。

ふと、社畜だった幾人かのギルドメンバーを思い出す。思い出した懐かしい面々に、知らず知らずのうちに心が沸き立つのを感じた。(へロへロさん、来ていないかなあ。ログアウトした後をやっぱりふらつと戻ってきたとかで。転移の謎も解明されていないままだし。プレイヤーの痕跡はかなりあるんだけど”どうして””っていうのはわからないままだし……)

「アインズ様どうかされましたか？」

側に控えていたアルベドから心配するような声がかけられる。

アインズの顔は骸骨である。

しかしアルベドは、そんな表情には出ないはずのアインズの心の微細な動きにすら気づく。

本人曰く”大切なお方の心を推し測る事など出来て当たり前”だそうだが、だからと言ってじつと顔を見られるのは面映い。

何よりも背筋に寒気が走る。

ひよつとしたら猛獣を前にした小動物はこんな気持ちになるのかもしれない。それ程までに一途で、強い視線をアルベドはアインズに送ってくるのだ。

「いや、なんでもない」

手を振り、誤魔化すように判子を押し、次の紙へと手を伸ばす。読み始めようとした時、控えめなノックの音。

応えを返すと鈴を転がすような声色のメイドが久方ぶりに聞く名前を告げた。

「失礼しますアインズ様。パンドラズ・アクター様をご帰還されました。報告したい事があるのですが、お通ししてよろしいでしょうか？」

メイドは静々と最高の気品と礼儀をまもっていた。このナザリツクに相応しいその態度に恥じないように、アインズも絶対者の態度で臨んでいる。

「よい、通せ。帰ってきたら一番に報告に来るように伝えたのは私だ」  
低く落ち着いた、それでいて尊大な声は最近では自然と出てくるようになっていた。

それ程長い月日をこの世界で生きたという事だった。

既に鈴木悟として生きた年数よりも、アインズ・ウール・ゴウンとした生きた年数の方が長い。呼ばれることは永遠に無いだろう本当の名前にほんの少し心が動かされた気がした。

束の間の物想いは甲高く響くノックの音で遮られる。

無駄に手首のスナップを効かせたりズミカルな音。この特徴的なノックは当然一人の人物を指していた。

「入れ、パンドラズ・アクター」

失礼します！ という大声に隣のアルベドがピクリと顔を動かす。静謐をもつとうとするーと僕たちが思っているー九階層においてパンドラズ・アクターは悪目立ちする。アインズとしても、もしできるのならば今すぐ編集ツールを使ってパンドラズ・アクターの設定を書き直したいところだ。これから来るだろう精神的な攻撃の前に、アインズは自らの心に喝を入れた。

「お久しぶりですアインズ様！ パンドラズ・アクター帰参いたしました！ してございます！」

(うわあ……)

軍服のコートを払いのけながら跪く姿は、もしここが舞台の上で、そしてやっている者の身目が良かったらさぞ絵になっただろう。

残念ながらここはアインズの執務室であり、やっている者も何処か間抜けさを感じさせる造形の異形種である。

「元氣そうで何よりだ。早速で悪いが報告を」

劳いの言葉の後に早速本題に入る。

パンドラズ・アクターに任せている仕事は大きく二つ。

一つは本来の役割であるナザリツク地下大墳墓の財政管理。

もう一つが最近本格的に始動した“プレイヤー探し”。

パンドラズ・アクターに新しい人間の外装を設定して行われるそれは、冒険者だけでは拾いきれない各地の情報を集めることだ。そしてその情報を元に嘗てのアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーを探す。ついでに魔導国民の動向を探り反乱などを事前に見つける役

目もある。

（うんうん。作戦は上出来じゃないか！ やっぱり亜人や異形種も居るって言っても、情報集めるなら基本は人間だしな！）

パンドラズ・アクターの情報に頷きながらアインズは内心ガッツポーズをする。

残念ながら今回の出向でもギルドメンバー探しの成果は上がらなかった。かわりに幾つかの気になる市民団体があるという報告がもたらされた。

「で、お前の言う気になる市民団体とはどんなものだ？ 場合によっては〈死の騎士〉を幾つかの場所に差し向けねばならないだろう」

「いえいえアインズ様！ その様な不屈き者でございましたら報告に上がる前に一掃しております！ 私は今回ある提案をしようと思いましたがこの団体の話をしたのでございます」

「ある提案？」

強調された単語を繰り返す。

仮にもナザリックにおける智者の一人。その提案に酷く興味が引かれた。

「そうでございます。現在魔導国民に施しております」パンとサーカス」そのサーカスにもう一つ新しい要素を加え、より！ アインズ様の素晴らしさを下々の者にまで伝えるのでございます」

「随分と勿体ぶるな？」

「これは失礼を。そのもう一つとは——芝居でございます」

「——芝居？」

「そうでございます。現在この魔導国では芝居をする者達が増えて来て居るのです。そしてこの者達の後押しをする事こそ！ ナザリックの利益に繋がるのだと提案させて頂きたいのです」

パンドラズ・アクターの言葉に、きゅつとアルベドの柳眉がつり上がる。しかしそれは徐々にはあるが下がり、ついには賛同するような微笑みすら浮かべた。

「——アルベドはどう思う？」

すっかり支配者ロールで染み付いたこの”自分より有能な者にそ

れとなく意見を聞く」。

今回もアイنزは早速使い、いまいち要領をえないパンドラズ・アクターの提案の真意を知ろうとした。

「アイنز様が創造した僕に相応しい、素晴らしい提案かと」

「う、うむ。そうだな、確かに良い提案ではあるな……」

「おお！ アイنز様！ 喜びに言葉もありません!!」

ズビシイと、音がするのではないかと言うほどに嬉しさを体で表現するパンドラズ・アクター。

アイنزは今日何回目かの、眩暈のする羞恥心かられた。

しかしそれも潮が引くようにおさまる。

(うう。ここに他の者が居れば楽に話が進むんだけどなあ)

智慧者の二人に挟まれ、唯の一般人でしかないアイズはない胃が締め付けられる思いにかられた。

心の中で盛大に汗を流しながら、アイズは判断を仰ぐように見つめてくる2対の瞳を見返す。

ここで取れる行動は一つ――。

「一考に値する意見である。後日階層守護者のみで集まる場を設け、そこで他の者の意見も聞こう。パンドラズ・アクター」

「はい！ アイズ様！」

「全ての者達にわかりやすく伝わるように説明を考えておけ。その際に掛かる予算を大雑把にまとめるように。アルベド」

「はい。アイズ様」

「会議の日程はお前に一任する。全員の都合を考慮した上で日時を決めよ」

「お任せくださいアイズ様」

「それでは下がれパンドラズ・アクターよ。お前の貴重な意見がナザリックの繁栄に繋がることと信じているぞ」

問題を先送りにして原因を下がらせた後、深いため息をつく。

取り敢えずこれで奴の提案の中身がわかる。まずい点があれば自分よりも優秀な智慧者が二人もついているのだ。それに万が一の時



は自分で止めればいい。

「お休みになられますか？」

ため息を聞きとがめたアルベドが心配そうにこちらを覗き込んでくる。大丈夫だと軽く返してアインズは心休まる執務に戻った。

伝説から抜け出した内装の空間。ナザリック地下大墳墓の最奥である王座の間。

そこには現在数人の異形種が集っていた。

「さて、守護者達よ。集まってくれて感謝しよう。今回は魔導国での新しい取り組みの案をパンドラズ・アクターが持ってきた。内容を精査した後、採用の可否を決める」

パンドラズ・アクター、とアインズが名前を呼ぶと、跪いていた姿勢から立ち上がる。

それに合わせて各々傳っていた頭をあげ、発言をする仲間へと視線を送る。

「本日、皆様に提案をしたい内容はこれでございます！」

羽織る外套を音がる勢いで広げて指し示した先には半透明のガラス。マジックアイテムであるそれはパンドラズ・アクターの意思に合わせて読み込んだ画像を映し出す。

「私は先日まで魔導国の視察をしており、そのなかでの気づきを元に出してきたアイデアでございます。現在、魔導国は建国以来アインズ様がおこなわれております善政、そして緩やかな領土拡大と大変好調であり、ギルド内の資産も拡大、世界征服への理想的な道のりを歩んでおります」

いくつかの視察中の記録画像。その中には農地で働くアンデットや舗装された街道を行き交う荷馬車が映し出されていた。他にも、種族の分け隔てなく組まれた冒険者チーム、市場で呼び込みをする住人。それだけで魔導国がいかに活気のある豊かな国なのかうかがえる。

「そのなかでも現在急成長している娯楽があります」

大きく一面に映し出されたのは青空の下で少し高くなつた舞台に立ち、派手な服を身につけた男女。女の方は大きく口を開け、男の方はわざとらしいほどに不快な表情をしている。

「芝居でございます。生活が豊かになつた街の人々はこういった簡易舞台を作り、それぞれに有名な寓話を演じていました。中には我々をモチーフにしたものもあり、大変興味深いものも多くありました」

似たような映像が二個、三個と続き、最終的には数十続いた。パチン。

パンドラズ・アクターが指を鳴らすと今まで映されていた画像が消え、元の半透明の板になる。

「私はこの芝居を、魔導国の全土へ普及させる事を提案します！」

広い空間内にパンドラズ・アクターの芝居掛かつた声がかかります。その余韻が消えた後、遠慮がちに手が挙げられる。手の持ち主は第六階層守護者の一人であるアウラ。アインズから目線で発言の許可をもらうと、元気に立ち上がる。

「なんでナザリックが国民とはいえ外の者達に気を配る必要があるの？ そんなことしなくても今まで十分満足してるんだから別にいいじゃん。寧ろ勝手にあたし達の事を劇にするなんて不敬罪で裁くべきじゃない？」

「全くでありんす。寧ろなぜそんな奴らを見逃したでありんすか？」

アウラに続いてシャルティアも不快感を示す。自分達だけでも腹が立つというのに、さらに至高の御方まで。

「アインズ様。ご命令いただければ直ぐにでも不敬な者達を蹂躪しにいきんすが」

「よい。さて、パンドラズ・アクターよ。こういった不満が上がっているが、お前はこれを覆すメリットを語れるか？ 正直に言えば私も余り愉快的な気持ちでは無いからな」

（というか恥ずかし過ぎる。え？ 何？ そんなの学校のイジメだよ！ わざと大袈裟に真似して笑われてるに違いないじゃないか！）

もしもアルベドがあそこでパンドラズ・アクターの考えに賛同しなければやめさせるようにするところだった。魔王ロールに慣れたか

らと言っても人並みの羞恥心は残っている。あまりに酷いと抑制されるが、このなんとも言い難いレベルのものはジクジクと痛む口内炎のように燻るだけで鎮まる気配がないのだ。

「落ち着いてくださいお二方。それではメリットの方をご説明いたしましょう！」

踵を鳴らして敬礼をしたパンドラズ・アクター。甲高い音に答えるようにもう一度画像を映すガラス板。恥ずかしさの余り沈静化するアインズの問題。

「先ずはこの最古図書館にある、ある歴史書の写しをご覧ください——」

パンドラズ・アクターのプレゼンは簡単に言えばプロパガンダの一环に芝居を使うという内容であった。人間たちの間から自然に発生したこのコンテンツはいくら魔導国の権力で縛っても地下に地下に潜るだけでなくなならない。ならばいつそ魔導国と魔導国王の素晴らしさを伝えるために流れに乗ってはどうか。

アインズはパンドラズ・アクターの熱弁を聞き流しながら感心する。プロパガンダで国民を纏めるといふ事自体は考えなかつた事では無いが、視察に行ったなかで自ら気づき方法として取り入れようとするのは流石はナザリック最高の頭脳の一角といったところだろう。「ふむ。パンドラズ・アクターの提案の真意は皆分かつたようだな。しばらく時間をやろう。決まったようなら多数決に移る。それぞれ賛成の理由と反対の理由を言え。最終的に私が判断する」

これは最近アインズが生み出した方針会議方法だ。誰かの意見をそのまま採用すると、設定の関係上アルベドやデミウルゴスの意見が多くなる。しかしこうする事でそれぞれの意見がわかり、考える力もつく上、褒める対象もばらつかせることができる。何よりも良いのはユグドラシル時代を思い出せる。

四十一人の玉石混交した意見。

その調整役はすっかり慣れたもので自信をもてる。最終的にとんでもない方向に纏まろうとしているのを止めることができるのも良い。未だに守護者を中心とするNPCはナザリック中心主義。そ

れを否定するのはもう半ば諦めてはいるが、最後のブレーキ位は握って居なくては。

つらつらと考えている内に皆の考えがまとまったようだった。

「それでは採決に移る。まずは賛成のもの——」

結果は全員一致での可決。

後日、パンドラズ・アクターのもたらしたこの提案は様々な修正を加えられた後に施行された。

それよりしばらく後、この提案によりアインズ精神安定が止まらなくなる出来事が起こるのだが、それはまた別の話である。

## 失われた光・前

「ギルド」常緑の国」サブマスターのマルコ・フランシスだ。お目にかかれて嬉しいよ」

案内されたのは地下にある独房だった。驚くほどの強固な守りの内側に、その男は居た。しかしそれは中のもを守るといふよりは中のもを閉じ込める為のもの。そのように感じられた。実際デミウルゴスには独房の中から芳しい血と苦痛の残滓が感じられる。

そんな仲間に与えるには相応しくない檻の中に居たのはこれとって特徴の薄い男だった。服装も装備も、何もかもがみすぼらしい。正直、デミウルゴスであつても単騎で勝てるだろう。

「ナザリック地下大墳墓第七階層守護者、デミウルゴスと申します」  
強さだけが全てではない。自らが強いと傲れば足元を掬われるという事は、こちらに来てからの長い年月で心に刻んでいる。しかしそれでも、と考えてしまう。

「ああ、うちのギルドは一枚岩じゃないんだ。気づかずに身の振り方を間違つてしまつてね。それで僕は最高権力者に睨まれたつて訳さ」  
微妙な空気を読んだのかマルコはそう言う。

そうですかとデミウルゴスは軽く流す。本題に早く入り、ナザリックへと早く帰りたい。勿論、任された仕事を全て完璧にやり終えてだ。

「単刀直入に言いましょう。ギルド武器を探しています。何処にありますか？」

「……ある条件さえ飲んで貰えれば全て教えるよ。知つてる限りの仲間の装備の情報も、ギルドが持つてるワールドアイテムの情報も、全部話す。ただ、あの子の無事を、命を、幸福を！ 約束してくれ！」  
突然荒げられた声。それに悪魔は微笑む。

人間の強い感情ほど愉快なものはない。しかし、とデミウルゴスは表情を引き締めた。これは偉大なる主人に任された重要な任務。それをあまりにも楽しみ過ぎるのはいただけない。至高の御方に忠義

を尽くすために自分たちはいるのだから。

「ええ、ええ、勿論。そんな事でしたらお安い御用ですよ。それで？  
あなたの想うその子とは？」

デミウルゴスは悪魔的にわらう。

普通だったら何処か違和感のある笑顔に疑問を持つところなのだが、マルコはその笑顔を見てとても安心した。ここに入れられてから日々摩耗していった精神。それでも彼は生きるしか無かった。

彼の、唯一の心残り。

死ぬわけにはいかない理由が驚く程簡単に無くなった。

「良かった。光って言います。このNPCで、そして、あ」

とても安心した表情でマルコは言葉を吐き出す。

しかし続く言葉にデミウルゴスの顔は凍りついた。

それは迷子になった少年が母の後ろ姿を見つけた時のように無垢なものであった。

「明美さんの！ アインズ・ウール・ゴウンに居たやまいこさんの妹の！  
子供なんだ！ そうか、良かった。良かった……」

ああ安心したと、そう言つて崩れ落ちるマルコにデミウルゴスは詰め寄る。この1000年で初めての、至高の御方につながる情報だ。それに食いついた所で一体誰が彼を咎められるだろうか。

「やまいこ様が?! いいえ、やまいこ様の妹であらせられる明美様がここにいらつしやるのですか!？」

血の気が引いた顔。もしも本当にいるのなら僕達に作戦の変更を伝えなければいけないだろう。至高の存在の、その妹君を傷つけたとあつては叱責ではすむまい。

それに何よりも己を許す事は出来ないだろう。

「——いや、明美さんはこつちには来てないよ。残念ではないよね、幸いな事にね。あの人がこの風景を見たらとても悲しむだろうから、本当に来なくて良かったと思う」

遠い目をするマルコ。彼が語った言葉はデミウルゴスにひとまずの安心と、そして疑問を残す。その疑問はむくむくと膨らみ、彼の優秀な頭脳は一つの結論を導き出す。

「明美様の作られたNPCとは何処にいるのですか？」

「わからない。僕に対する弱みとしてギルドマスターが何処かへ連れて行ったんだ。最後に会ったのは3日前。多分まだ何処かにいるはずだ。彼女を探して連れてきてくれたら何でも話すよ。見た目は黒髪の幼いエルフの女の子だ。確かお姉さんの作ったNPCから見た目を貸してもらったって聞いたから、君だったら見分けがつくんじやないかな？」

「やまいご様の作られたNPC……女の子という事はユリ・アルファの事、でしょうか？」

「詳しくは知らないよ。酷い目にあってなければ良いけれど……」

「……」

デミウルゴスはその煌めく瞳で男を見つめる。

男が明美の作ったNPCに向ける眼差しがよく見るものだったからだ。

(アインズ様が私達ナザリックのNPCに向けるものと同じものを見せている。明美様のNPCは幸せものですね)

男を下等な生物と見ている事には変わりはない。弄んで絶望させて苦しませて。思いつく限りの悲惨な目にあわせたいという欲求も未だある。

しかし。

しかしこの眼差しは嫌いではない。

最初は助けると約束した者と血で血を洗う闘いをしてもらおうかと思っていたが、どうやら彼も、彼の言うNPCも、貴重な情報源でもあるようだ。

眼鏡を指で押し上げて思考する。

この地にいる悪魔の、その誰もが未だに彼の言ったようなNPCは見つけてはいない。そして、ギルド武器も見つけてはいない。

既にこの拠点はデミウルゴスの制圧下である。ここにいたプレイヤーも、NPCも、その全てを無力化している。にもかかわらず発見できていないのだ。

だとすると答えは一つだろう。

「へ悪魔の諸相：豪魔の巨腕」

デミウルゴスの腕が通常の倍以上に膨れ上がる。そして拳を握り、叩きつけるように牢の鉄格子を殴りつける。

「ふむ。見た目以上に頑丈ですね。へ悪魔の諸相：鋭利な断爪」

次に変化が起きたのはデミウルゴスの指の先、爪だった。瞬きする間に伸びたそれを巨大な腕の腕力にものを言わせて切りつける。

キインという澄んだ音が響く。鉄格子に傷はついていない。代わりにデミウルゴスの爪が半ばから折れていた。

「戦闘に特化して作られていないとはいえ、流石にこれは……いや、ウルベルト様に不満など欠片も無いのですがね」

不敬になりかねない発言を改めながらぶつぶつと呟く。視線は短くなった爪に固定されていた。一方マルコはデミウルゴスが何をやるうとしているのかを察して、できるだけ鉄格子から離れた所に移動した。間違つて攻撃を受けても即死は無いだろうが、近寄りたくないものでも無かった。

「この牢屋の堅牢さは並の100レベルプレイヤーじゃあ歯が立たない作りになっているからな。……僕を連れて行こうとしてるって事は光の居場所の目星がついたのかい？」

「勿論です。おそらくギルド武器と同じ空間にいるものと思われま

す。私達が立ち入る事は可能ですか？」  
「それだったら僕がいれば簡単に入れるさ！ 誰か他を呼んだ方が良いんじゃないかい？ 君や僕じゃあとてもじゃないけれど壊せないよ」

デミウルゴスはマルコとの会話の途中もその巨大な腕で格子を殴り続ける。相当な衝撃を受けているにも関わらず、格子には罅どころか歪みすらない。

しかしデミウルゴスの表情には焦りは無かった。

唯の暇つぶしのように叩きつけられていた腕は急にその動きを止める。

静かになった空間に別の音が聞こえ始めた。

それは氷でできた鎧が擦れるような、涼やかに澄んだ音だった。



「呼ンダカ、デミウルゴス」

現れたのは身の丈3メートルに迫るかという巨大な虫だった。白銀の鎧は暗闇でキラキラと光り、その巨大な顎の間の、口と思われる所からは冷気が噴き出す。

現れたのはナザリツク地下大墳墓の階層守護者の一人、コキュートスだった。

正に異形の者といった出で立ちの者にマルコは先程より一層身を縮める。外装からいつてかなりのパワーファイターの様だ。きつとこの格子も破壊できるだろう。

「待っていたよ、コキュートス。仕事が終わったのにすまないね。私ではとても歯が立たなくてね」

「ウム。気ニスルナ、全テハ偉大ナル御方とナザリツクノ為ダ。使イ魔カラ話ハ聞イテイル……カナリ頑丈ニデキテイルヨウダ。少シ下ガツテオイテクレ」

デミウルゴスを下がらせるとコキュートスはインベントリから取り出した巨大な太刀を振り上げる。それはコキュートスの持つ武器の中でも耐久力に大ダメージを与えられる毛並みの変わったものだ。創造主である武人建御雷が最後にコキュートスの元へ現れた時に下賜された武器の一つであり、性能を特化させた伝説級の業物であった。「世界級の防具には歯が立たなかつたけどな」と、こぼしていた事をコキュートスは覚えている。

「ハマカブル・スマイト・フロストバーン〜！」

スキルの発動とともに一撃一撃に渾身の力を込めた連撃が繰り出される。

一撃で格子が歪み、二撃でその歪みがひどくなる。

正確に同じ所に繰り出される技に、十を数えずボキンという低い悲鳴をあげて檻は壊れた。更にコキュートスはダメ押しの一撃としてもう一撃叩き込む。

後に残ったのは一人一人が楽に潜って外に出られるだろう穴。そしてフシユウウウと大きく噴きでたコキュートスの白い息だった。

牢屋からマルコを出した後、デミウルゴスがまずやろうとしたのはパンドラズ・アクターとの連絡だった。

先程の定時連絡から時間は経っていないが大きく事態は動いた。中でもやまいこの妹、明美が残したNPCは大きくアインズの心を動かすだろう。そんな思いで起動した〈伝言〉はかかる気配すらもなく切れた。

マルコに聞くと、どうやらこの地下は敵味方の区別無く監視や〈伝言〉などの情報を得たりやりとりしたりする魔法が使えないようになっていられるらしい。仕方がないのでデミウルゴスは僕の一体に情報を届けて置くように指示をだした。

直接自分が報告してアインズ様に褒めてもらいたかった。

そんな少しの不機嫌さを出しながらデミウルゴスはマルコの後を行く。

「ここを抜ければ目的の場所だよ。『死の国』って言ってね、最高レベルのNPCを配置した最後の砦の筈だったんだ」

「だった、とは?」

「今のギルマスの事だからきつと『謁見』に連れて行ってるんじゃないかな? 今は拠点からNPC出れるでしょ? ギルマスだったらやりそうだなあって思ってたね」

「随分ト他人事ダナ」

「そうかな? ……ここを、この拠点を手に入れた時にギルドに居たのは今じゃあ僕だけだからかな。他のメンバーも来ていれば違ったのかもだけど。正直、最近の加入者なんて殆ど分からないんだよね。まだ拠点NPCの方が良く知ってるよ」

「……」

「ギルドをやめていったみんなにもそれぞれ生活あるから、まあ、仕方ないとは思うんだけどね。僕もサービス終了間近まであんまり来て無かったよ。君達のギルドマスターはどうなんだい? ……モモンガさん、だったよね?」

「今ではアインズ・ウール・ゴウンと名乗っておいでです。偉大なる主人は常に私どもの上に君臨されていました、それに、長くナザリツク

をあけられる事はありませんでした」

「そうか……。モモンガさんは良いギルドマスターなんだね」

静かな会話。

足音のみが響く空間は広い様で狭く、しかしコキュートスでも不自由無く動ける程度には広さがある。

マルコは徐に立ち止まる。それは今まで通り抜けてきた扉の中でも一際質素な扉であった。

「ここが僕らの宝物庫だよ。ギルド武器はこの奥にある」

「本当にここが宝物庫ですか？」

デミウルゴスはナザリツクの宝物殿を思い浮かべる。アインズが作った唯一のNPCが守護するそこへは厳重に厳重を重ねた罫や仕掛けを解いて行かなければ辿り着けない。そもそもその空間へはギルドメンバーの証である指輪まで必要なのだ。

それと比較してなんとみすばらしい事だろうか。

「あ、騙す気なんて全く無いからね。言っとくけど、よっぽどのギルド以外の宝物庫なんてこんなものだから。よっぽど信用できるギルドスじゃ無い限り自分の時間と労力をかけて手に入れたアイテムなんてギルドに預ける訳ないでしょ？」

そう言いながらマルコはゆっくりと開かれた扉の中には山積みの金貨。そして整理されたレアアイテムが軒を連ねていた。

「まあ精々が個人所有する迄もない下級のレアアイテムと、カンストして持ち歩けなくなった金貨位だよ」

そこでマルコは振り返ると、自分の後をついてきたデミウルゴスとコキュートスに真剣な表情で語りかける。

「ただ、ギルド武器は違う。この奥にあるギルド武器を置いている部屋にはギルドメンバー相手にすらも避けれない仕掛けがあるんだ。正直いって、今の僕じゃあ無理だね。仕掛け自体は色んなギルドの守りを参考にしてるらしいけど、正解のギルド武器を手に入れるのは気が遠くなると思うよ」

「……コキュートス、任せてもよろしいですか？」

「問題ナイ」

前衛であるコキュートスが緊張した面持ちでゆっくりと扉が開く。眩いほどの光の中、最初に見えたのはその光についた黒い染みの様な存在だった。

その染みは動いていた。

どろりどろりとその黒いものを溢れさせていた。

溢れた黒い淀みは、壁や床に触れると途端に姿を変える。それは金。金色に輝く林檎だった。部屋一面に転がる林檎は全て同じ形の同じ色。異様な光景に流石のデミウルゴスも驚きに目を見開く。

「これは一体？」

「木を隠すなら森の中。ギルド武器を、まあ量産可能な品物に変えて偽物の中に隠してるんだよ。ここにギルド武器があるって知らなかったらただのへんな部屋だし、知ってたとしてもこれ全部持ち帰って鑑定するのは面倒だろう？ 生産系の純ビルド組んで貰える魔法が無いと鑑定すらも出来ない。壊すだけだったら簡単だと思うけど」

「それが目的ではありませんから。……これは運ぶのがとても面倒ですね。僕を何体か呼びましょう。しかし、貴方の言うNPCは見当たりませんね。ここに居ると思っていたのですが」

「心当たりがここって安直すぎないか？」

「そうですね？ 見張る場所は少ない方が戦力の減っている今は何かと都合がよろしいでしょう？」

「シカシ、コノ量ノ荷ヲ運び出ダスノハ面倒ダ」

「そうだねコキュートス。君の指揮していた第一陣は既に帰還済みだろうし、ここはこれの出番かな」

デミウルゴスが取り出したのは何体もの悪魔の彫刻が彫られた像。見るものに底知れぬ力を持っていると思わせるそれに、横で見ているマルコが驚く。

「それって……！」

「貴方の想像通りの物とだけ言いましょう。さて悪魔たちよ。この物を全て運び出し——」

デミウルゴスの言葉は途中で途切れる。彼は訝しげに眉をひそめると鋭い声を上げる。

「コキュートス！ 迎撃用意を!!」

その言葉とともに部屋を鋭い光が包む。

コキュートスは二人を守る様に光に立ちはだかり、デミウルゴスはコキュートスへ支援魔法をかけた。光が止んだ後、そこには林檎のひとかけらも残っていなかった。

「なっ」

驚愕の声を上げるマルコの体にいくつもの文字が浮かび上がる。もしユグドラシルプレイヤーが見たらすぐにそれがギルド武器を破壊されたギルドメンバーに課されるペナルティだと気づいただろう。「寝返って敵につくなんてやっぱ裏切ってたのねサブマス!! 正直言って見損ないました!」

部屋の奥の方、林檎が湧き出ていた黒い穴の向こうから凜とした声とともに七人の男女が出てくる。その真ん中に守られる様にいる人物にマルコは声を上げる。

「光!」

「ししよー!!」

盗賊らしい女に押さえつけられて居るのは場違いな程幼い女の子だった。まっすぐな黒髪から飛び出す長い耳が彼女が森妖精なのだと見て取れる。その顔を見たデミウルゴスからは納得の吐息が、事情を知らされていないコキュートスからは派手な冷気があがった。

「デミウルゴス、コレハ……?」

「やまいこ様の妹君である明美様のNPCだそうです」

「ソウカ。ソレハ……アインズ様二良イ手土産ガデキタナ」

取り敢えずはここから離れ、ナザリックへ戻る事が先決だとお互い目配せし合うと敵対者へと向き直る。マルコ達の方も話に区切りがついたのか、ヒステリックな声上がる。

「もう終わりね! ギルド武器も壊れちゃったし! ギルドを台無しにするなんてもう最低よ! この最低な模様も! 全部全部あんたのせい!!」

「アリス……それは本当に僕じゃな」

「アリス様。敵が戦闘準備に入っております。お戯れもほどほどに」

敵NPCが警告を発したのを皮切りに戦闘が始まる。既にかけていたバフに追加でいくつか。なし崩しでマルコからも支援が飛ぶ。人質になる前にと光の奪還にコキュートスが向かう。三本の手に武器を手にしたコキュートスは相手が驚愕するスピードで迫った。

迎撃に攻撃魔法がいくつもコキュートスに飛ぶ。しかしそのどれも彼を止めるには至っていない。まるでレベル差が開いているかのようにダメージが通っていないのだ。後衛の魔法を物ともせず、前衛を抜け、未だ信じられないという表情の盗賊から光を奪還する。急いで下がるコキュートスと入れ替わりでデミウルゴスの召喚した悪魔が追撃を阻止する。

敵が高レベルの悪魔に時間をくっている間にきた道に戻る。マルコが光と手を繋いで先導するなかで足止め用の悪魔を更に召喚しつつデミウルゴスとコキュートスは後に続く。外に出れば〈伝言〉が通じる様になるはずだ。そうすればナザリックに連絡ができる。シャルティアにつながれば〈異界門〉ですぐに迎えに来てくれるはずだ。「コキュートス、外に出たら〈伝言〉をお願いしても良いかね？ 人数差から言ってここで無理をするのは良くないと思います」

「ソウダナ準備ヲシテオコウ」

羊皮紙を手を持ったコキュートス。しかしその手に持った羊皮紙を素早く掠め取る影があつた。一足先に追いついた盗賊がスキルでコキュートスの羊皮紙を盗んだのだ。仲間の元へ逃げる背中を袈裟斬りに切りつけると、悲鳴が上がる。

「追イツカレタ様ダナ」

「簡単には逃してはくれませんか……。マルコさん、よろしければ向こうの戦力を教えていただいても？」

「あ、ああ。えーと、前衛がらんすとオットーで——」

「……役割とスキル構成を中心にお願いします」

「あ、すみません。支援一人、特殊一人、中衛一人、後衛一人、前衛二人。前衛は完全な壁役大したダメージは出せないと思います。後衛が火力重視の魔力系魔術詠唱者。特殊がさっきの盗賊。支援の子がアリスで回復は盗賊のポーションとアリスの魔法だけのはずです」

「なるほど。魔術詠唱者さえ押さえれば後は簡単にいきそうですね」  
「多分。でもひよつとしたらまだ伏兵がいるかも。人数で不利なうちは油断は禁物だと思いますよ」

「勿論です。外にも伏兵がいるようですからね。情報伝達用の使い魔が殺されました。それに外に配置していた配下も繋がりを感ぜません」

「挟ミ撃チトイウ事カ」

腹立たしげにコキュートスは冷気を吐き出す。

それに苦笑しながら、デミウルゴスは言葉を続ける。

「流石はプレイヤーと言った所ですね。チームでの連携で挑まれては私たちでは経験不足で足を引っ張ってしまっています。コキュートス」

「ナンダ」

「『指輪』を持った貴方がこの中で最も生還率が高いでしょう。いざとなったら彼女を連れて逃げてください」

異形の二人から一番遠い位置に居た光の目が揺れ、不安そうにマルコを見上げる。マルコは安心させる様に笑うと、光を抱きかかえる。これが最後の抱擁になるかもしれない。時間をかけて抱きしめて、ゆっくりとした口調で想いを伝えて、そしてコキュートスへと渡す。

「光を頼みます」

「し、ししよお」

悲痛な顔で情けない声を出す光に改めてマルコは笑顔を返す。

「明美さんのお姉さんがいるギルドの人だから大丈夫だよ。今戦っているのは勘違いが原因なんだ。光は先に向こうの、アインズ・ウール・ゴウンのモモンガさんに会ってお母さんとお姉さんの話をしてあげて。僕もきつと行くから」

小指と小指を絡めた約束を交わし、マルコは手を離す。

地上への出口はすぐそこに見えていた。

## 失われた光・後

ねむい目をごしごししておきたら、こわいかおのおねえさんと、こわいかおのおにいさんがいた。わたしはしってる。この方たちは、わたしのおかあさまと同じすごい人なんだってわかる。

だってわたしはえぬぴーしーだから。おかあさまたちことはすごい人だってあたりまえなの。

でも、すごい人でもこわいかおはこわい。なきそうになって、でもがまんした。だって、ししよーがわらっててっていったから。おかあさまの次にだいすきなししよー。

目のまえはうるうるで、ゆめの中みたい。とてもこわいけど、いっしょうけんめいわらった。

わたしのうで、いたくつかんでたおねえさんに「気持ち悪い」ってなぐられた。とてもいたくて、とてもかなしくなった。

そばにいるのは知らない人ばかり。

どうしてししよーはいっしよじゃないの？ どうしておかあさまはむかえにこないの？ かなしくなって、かなしくなって、でもがまんした。

ししよーとずっとあつてない。

ししよーにあたまをよしよしってなでてほしい。

ししよーに手をつないでだいすきだよって言ってほしい。

ずっとずっとひとりできて、でもひさしぶりにししよーといっしよのくらいへや。

でもさみしい。だってししよーはお外にひとりでいくの。ひとりできてほかの、こわい顔のおにいさんたちにひどいことされるの。

わたしはひとりでおへやの中。くらいくらい、こわいへや。

ずっとずっとわたしはそこにおいて、けつたりたたかれたり、いたいことされるししよーを見てた。



お外はこわい。

おへやの外で、まっかなししよーがわらうのがこわい。

ぼくはだいじょうぶだから。そういってわらうししよーを見てる  
しかないのがずっとこわい。

なんかいもなんかいも、うごかなくなるししよーを笑っているみんながとてこわい。

こわいのがいやで、目をつぶって、もとにもどれてなんどもなんどもおもった。でもししよーのくるしいこえがきこえる。ずっとずつときこえる。

こわいおにいさんの、たのしそうなこえもきこえる。

それがともいやだった。

すごい人だから、そんなことおもっちゃダメなのに。

はやくなくなつてほしかった。

目をあけたらまっかなへやじゃなかった。

ぼんやりしてよくわからなくて。

かたくてひんやりした。たくさんたくさんうえしたにうごいて、でも側にししよーが居た。

かたくてひんやりした手から、あたたかくてやわらかいししよーの手に。

うれしくなつて手をにぎった。手はあたたかかった。

うれしくてみあげた。ししよーのかおもうれしそうだった。

でも、ししよーはおいかけてをしないで、たくさんたくさん早く走った。わたしも、ししよーにおいていかれないようにたくさんたくさんはしった。ししよーはわたしがくるしくなったらだいてくれた。ぎゅつてしたらししよーのにおいがした。

「光、今からする約束を守ってくれる？」

たくさんたくさん走ったあと。わたしをぎゅつとしたししよーはそういった。ししよーはよくやくそくをする人だった。やくそくをまもるとしあわせになるから、うんつていった。

「じゃあ、お約束一つめ。僕は少し疲れたから、休憩するね。絶対に追いつくから、それまで赤い服のお兄さんと、水色の虫さんの言うことを聞いて」

こしよこしよばなしで耳がこしよぐったい。それが寝る前のおやすみのごあいさつみたいで、たのしくて、うんっていった。

「二つめ。もしモモンガさんっていう人に会ったら沢山お話ししてあげて。明美さんのお話しを。明美さんのお姉さんのお話しを。モモンガさんは怖い見た目の人だけど、とても良い人だから」

おかあさまの話をするのは好きだから、うんっていった。

「最後のお約束。僕が君を娘の様に愛している事を忘れないで。死んじゃだめだよ長く長く生きて。幸せになって」

ししよーはかなしいかおになっていた。ないちやうまえの、くしやつとしたかお。わたしはあたまをよしよししながら、うんっていった。

ししよーはうれしいのかかなしいのかわからないかおをした。でもぎゅつてくるしいくらいしてくれて、ゆびきりまでした。

水色の虫さんに、ししよーがわたしをはいってする。

すこしこわくてししよーをよんだら、だいじょうぶだってわらわれた。

虫さんのうではかたくてつめたくて、ふしぎなかんじだ。

「明美さんのお姉さんがいるギルドの人だから大丈夫だよ。光は先に向こうの、アインズ・ウール・ゴウンのモモンガさんに会ってお母さんとお姉さんの話しをしてあげて。僕もきつと行くから」

「心配はいりません。今回ばかりはナザリックの外の者とはいえ、命に代えてもアインズ様の元へ届けるとお約束いたします」

ししよーにそういった赤い人はこわい口をやさしくしていた。

赤い人のことばでししよーはえがおになった。

わたしもうれしくなった。

ししよーが早くこないかなって、むしさんのうでの中でわくわくしてた。

それは幼い少女の記憶。忘れられない別れの記憶。  
無邪気に健気に待っていた。  
ある少女の始まりの話。



一つの腕に持つ斧で目の前の木を切り倒し、一つの手に森妖精の少女を抱く。残りの手に造物主である武人建御雷から下賜された武器。武器攻撃職を多く修めた自分の能力を最大に活かすべく選りすぐられた最高の業物。外骨格の淡く輝く体には仲間からの強化魔法。首や手足に自分の為にしつらえられたアクセサリ。指には至高の御方から貸し与えられた強力な指輪。

そのどれを取っても追撃をしてくる者達よりも数段勝る装備品。しかし数々の最高装備も、数の暴力には勝てなかった。

今や彼は反撃で殆どのスキルを使い果たし、残りMPも殆ど残っていない。HPはまだ半分近く残っているが、だからといって勝機は薄いだろう。

コキュートスは考える。

今の自分ができる最善の策はなんなのかを。

コキュートスは選択する。

何がナザリツクにとって最善なのかを。

油断させ勝機を見出す為に降参することか？

武人らしく討ち死にすることか？

答えは否。断じて否。たとえそれが一般的な最善だとしても、武人にして忠臣。そう設定された自分にそれは許されない。

無数の攻撃を共に受け、なんとか一命を保っているか弱き命を、なんとんでも主人の元へ届けなくてはいけないのだ。

降参するのもよい。だがそれはこの森妖精を主人の元へ送ってか

らだ。

討ち死にするのも良い。だがそれはこの脆い命を巻き込まない様にしてからだ。

通信手段になる〈伝言〉の巻物を取り出す。予備も含めて10数あった巻物は全て敵に無効化された。最後の一枚を敵の死角になる様に工夫した。後は相手の通信阻害魔法が切れたら――。走りながら器用に複数の作業をやる彼の努力も虚しく、少しの動きの差から敵はコキュートスが巻物を取り出したのを察知する。

「往生際が悪いなあ！　〈魔法効果範囲拡大〉〈上位道具破壊〉!!」  
手に隠し持っていた巻物が砂になって消える。

カチカチと不機嫌に顎を鳴らし、コキュートスはこちらからの最後の連絡手段が消滅したのを受け入れた。最後の望みはニグレドの監視が届いていることだが、敵のギルド拠点を出る際にトラップにかかり監視の範囲から外れてしまった。援軍は絶望的だろう。

(ナラバ、コウスルシカアルマイ)

追っ手を十分引き離れた所でコキュートスは腕を旋回させて周りが見通せる程の広場を作る。そして残ったMPを使って〈細氷結晶〉を発動した。コキュートスの周囲から極小の氷の粒が舞い上がり、辺り一面をキラキラと真っ白に染める。コキュートスが使える魔法の中でも珍しい認識阻害系の魔法であり、本来は彼の守護階層のフィールド効果と合わせて隠蔽率を看破不可能な迄に上げるのが目的だ。

この森の中では精々が見通しが利かなくなり命中率が落ちる程度だろう。しかしそれでいい。

コキュートスがこれを選んだのは何も奇襲を仕掛ける為ではない。使ったMPに応じて効果時間が延長されるこの魔法は、今回コキュートスが使ったMPを考えると10分はこの場で効果を発揮するだろう。コキュートスが倒されたとしても。

「〈地蟲蠢動〉……〈フロストオーラ〉！」

残ったスキルでワーム系のモンスターを呼び、巨大なその口に森妖精の少女を放り込む。レベルがそこまで高くないモンスターであるから、ワームによるダメージはないだろう。コキュートスは呼び出し

たモンスターにこの場から離れて森妖精の集落近くまで逃す様に伝える。相手に地中にいるモンスターにも効果のある魔法やスキルを持つ者が居ないのはこれまでの闘いでわかっているからこそその苦肉の策だ。これでも駄目だったらその時は最善を尽くしても駄目だったと諦めるしかない。

モンスターが地中に潜ったことを確認すると、フレンドリーファイアの為に切っていた常時発動スキルをオンにする。コキュートスを中心にあたりの地面が凍りつき、辺りはさながらスケートリンクのようだ。場を整えて、出来るだけここで時間を稼ぐ。

決意を固め森妖精の少女を抱いていた腕に再び武器を握ると、追いついてきた敵に相対する。

「観念したみたいだな」

「同じ100レベルとは思えない硬さだけど、やっぱり黒幕って事だよな？」

「あの1500人の攻略の時もこんなチート使ってたんだろう」

「ありえるな。ギルマスの話じゃあこの世界を作ったのも奴らしいし」

「でももうちょっとで倒せる」

手に持つ装備を入れ替え、氷に対する耐性のある防具を身につけるのをコキュートスは大人しくまった。どの道この戦力差では勝負が見えているのだ。向こうが時間を浪費してくれるのならそれだけあの森妖精の生存率が上がる。

モタモタと相手が準備しているうちに、コキュートスにかけられていた魔法の効果が切れる。それに寂しさを感じる自分に呆れた。

1000年前は一人で戦うのが当たり前だった。だから味方からの支援魔法など無かったし、一人で戦わなくなっただけでもそれが無くなったからと言って何も感じなかった。しかし今は違う。弱くなっただのかもしれない。仲間の助けが無くて心細いなど。けれどどうしてか、コキュートスはこの変化が心地よいと感じている。

低い雄叫びと共に前衛三人がバラバラの方向から攻撃を仕掛けてきた。一対他を想定した完璧な連携はコキュートスを以ってしても

崩すのは困難だ。

冷気ダメージを軽減させる装備を持っていなかったプレイヤーを一閃し、他の者を傷を負いながらもなんとか別の手でいなす。硬い金属の擦れる不快な音に負けない様にコキュートスは高く吠える。

「ココカラ先へ通ス訳ニハイカナイ！ 通りタケレバコノコキュートスノ屍ヲ越エテモラオウ!!」

氷の霧に紛れるそのライトブルーの体をゆすり、非公式ラストダンジョン3番目のボスは耳障りな叫びをあげた。本来の場所ではなく、既に満身創痍であり、MPもスキルも残っていない。

だからどうしたと言うのか。この身に刻まれた魂は、役割は、使命は何一つ変わりはない。

全ては栄えあるナザリックの為に。

全ては最後まで残られた慈悲深き主人の為に。

「イザ、尋常ニ勝負！」

デミウルゴス死亡、敵ギルド武器破壊によりナザリックの二面作戦が失敗した報を受けた10分後、アインズの元にコキュートス死亡の報せが届けられた。